雪の櫻

次第

咲揃えたる桜の里〳〵山路乃

男詞

春に萬の色　うやうやしき者

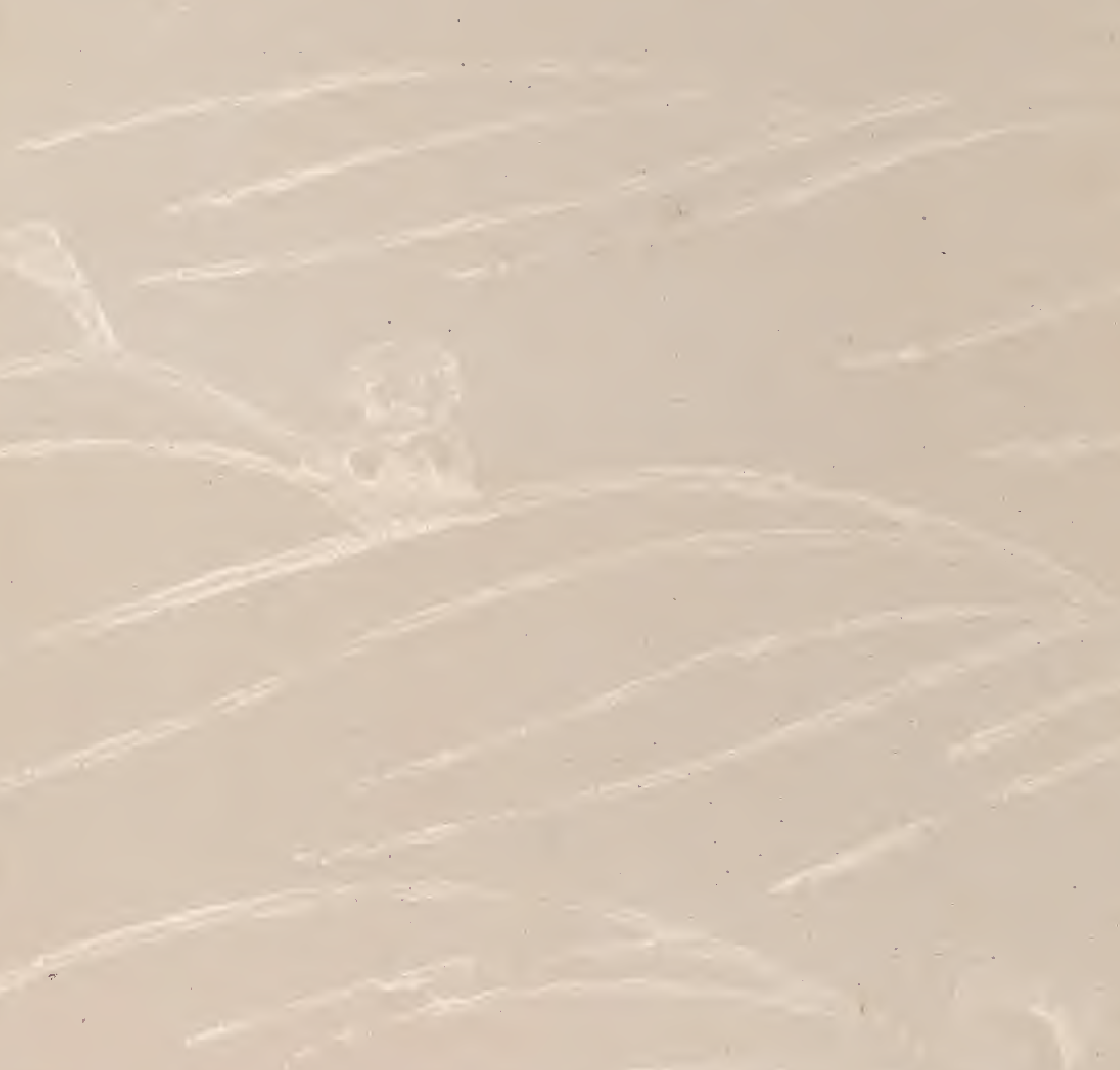
下京邊り住居仕る者にて候

さても我等は年ひさしく

しこの華をながめざき那のうち

山路に日を暮らしければ東山

地主の桜を一見仕ばやと存



又西山西行の庵室乃花盛なれ
よし承及ん雑よむ見の人々を
伴ひ只今西山西行乃庵室へと
急き候は　上哥　百千鳥さへづる春ハ
物ごとにあらたまれども我ぞふり行
月数へても弥生の空なれや
やう〳〵まはりて花乃友ぢなも

まだぬも誘ぞよごれもむなし
心う躰〳〵　詞　急候程に程無
はや西行の庵室に着てハ程く
暫く侍る人案内を申さう
ひるまうばいの小案内申にハ　男
誰そまこ渡すろう　さ世ん日きハ
我方の者にてハりばは庵室の

花さへのかはる由縁及びてく
見えゝ参りて候はいと清こう候へ
（シカレ）宗や間子まゝ候へ花楽寺乃
清子ゆく候去那のう清楼嬌を
こゝろとや以座し趣清待候へ
（男）然細道候さゝは見小渚てまち
やこそりかるまゝは（ミサレ）うつ梢草乃

花は上求本来乃梢よりあらはれき
ゞ縁の月下化迷縁の水小底と成
ぐう折り志染め水よ三保乃方も
なく須磨座の松乃風ニ譯の縁を
もらすかはらず東国太平をおさめつゝ（詞）
見仏聞法の結縁こそあはれなれ
四の時も勝まさる無為実相

折なる庵しぞ面白やな　同本
一の清様嬉しく好ゝ申さうり
いまや申しはわ此清庵の花を
見度よし申て是まで参り候出
まづは　羊詞　何と教よろしと申てば
庵室の花をながめ母為にござる
皆々来り見給ふと申り　ツカヽレ　さらんは

ロンギ　なよりの海の花の盛りの傍く見ると
いひならしし西行の庵室の大原
花も一木も独りと見る風もなを
り風遊へあまりのをたてゝ神世を
いりしな飛ざじて楠とりるく
来まするゝ海さしなぞみをつゝきて
いのちからへば多くあがる茶垣の

たる男女内へいりまゐらん　〽長て
はいり候へく候中はよむ
法様趣申てらんたこ影申せ
とのは子そらんほとよ急て
こなさへ出給ん　男　〽いはりん
楼花咲よれし那是了乃山の
ひよわ見えしますぞの本みち

もとふたちらまいり　〽和いみ心
さらとなる花の本に我花落葉を
観しはくびとよまへんなれはきのな
とくわふ　〽安林撰集のたくみ
んが乃り眼なきうむりそ　〽着みち
まるなへ威百様　〽めく神所の
山とい色ともき　〽なりし花乃

哀なりけれは すて人もまかす身は
何と隠家ハぐにさ嵯峨の奥
なれ花見るとりて山までも
浮世のきりふ為物をぎりよ
捨てもよし我が名をいとふ物を
うたくりに流る井乃住家なく
仍まて雨こそまきるる東に竹ふ

こゑをしはるこもやさしうきう
ゑんあまりし捨てゝ世乃な
とそゑ兼ひとしなる末孫本ふ
我身はさのこ袖ぬり躰のとか
心の深きなき花も世と思ふ
はるひとのくものえうかえり
きくまでとるはあまりく陰

上内

あゝら様のうきく頼て月入り

かせより来る春小紫旅忘れて

詠ながこゝろはい花乃下陰しく

行ゝこゝも小なりめあのさらん

三テ 埋木乃人さしぬ男まさめた

ざくら旅の毛花のころをりうや

り風のへ皆もむ旅はく人乃くは

のあるあらきくよ給ひは

ある之巻風 小(早吉ル) きゝや風折たる

花のうたかたもよしわが白髪乃老人

あかりきて西行 詞 か哥をよみける

百様ざるも不思議な風に旅なるの

三テ詞 是ハ夢中の仮ありさらん乃仮哥

のいを猶もたのまんためあり

詞

きゝわたれ　羊　そもや夢中の花

とはゞおもふもたゞ人ならぬ庵し

ごう物ふれきつるほつとらす都の言乃

んをえたるなれとは哥よ不審ら

あ屋うせ　三下詞　川や上人の詠歌よ

ばり不審のまへ義なれどもも

つゝひと隠ゝ候のみぞあらう

ご、、、、、、、詞

桜乃しりよはあやまさ國梅桜の

谷八けやもせし　上詞　川や見へたし

浮世をいとふ山住なる身ながら

雅集乃いとはしき心をいたし

誰ひるなるべき　上詞　あからう物なれと

詠事きうが不審小ろくとよ

浮世と見るも山と見るもたゞ

それ人の心にあるを非情無心の
草木都に浮世乃姿ハあし
実に見ハ理なや梅にこのやふ小
さつとりゐをなひげ芳色の様
花木の精り　まさるとハもの精
なほりごゑ　方もしもよ老木れ
櫻乃　花物いふぬ草木なれど

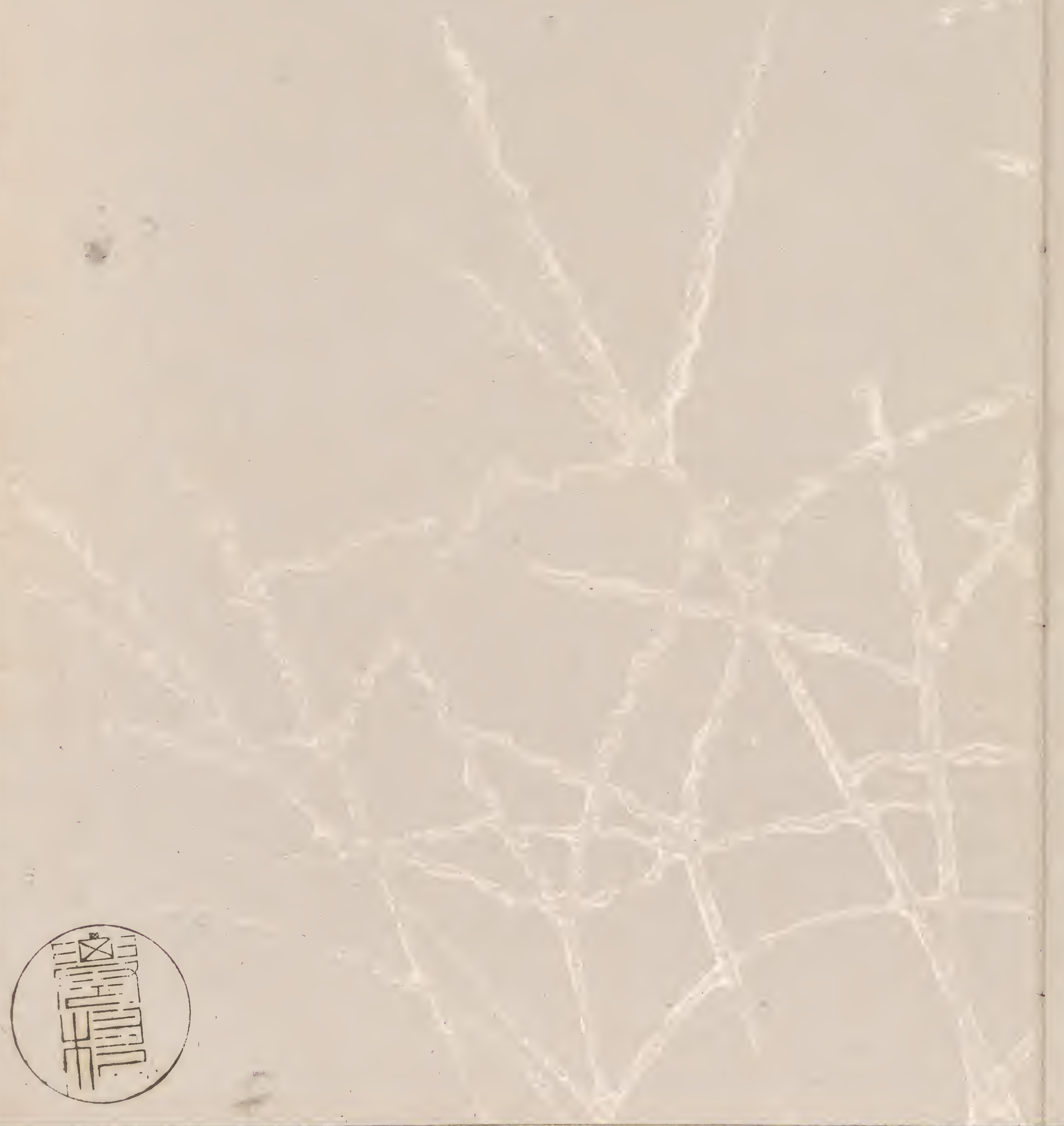
しうなよいり非を、ふり風の
うけくらひ底を　鶯のひなわ
恥しやきあのそもしくなく
枝くおてあふる櫻都姿乃なきさ
由をやひしくもの精ゆく地
凡心な愛草木も花実のおかを
まいまさめや草木國土皆成佛乃

比清多庵 き歌や上人乃
値遇よりの我てめでたき人の露
あまねくぞ樹前入り楽しみ
とこしきさんぐ林下小鳴て涙
ほのかゝう うれしよ落花を
踏て付けし過ぎて遁れは
花盛小ちりこの時て一時を惜る

九重小さきとも那の八重桜
いく代よへりる哉うそぬらむ
然るよ花の名高きハ先初花を
いそく那る近衛殿の糸ざくら
みわたせば柳桜をこきまぜて
都八春の錦しきさんらんたり
千本乃桜を植ゑきそ色を所の

なまみひるず本の花盛雲路や
宮小残るし食思河門堂路も塗
四王天の業も光明のる
まゝ原へき辻多原足谷下河原
ざまし通照修正の 上 清水の坂
所りしり知楽山鷲乃尾やとら
まるあ路を枯め鶴の林と思ひ

志るまそ薪まなわ清水寺乃地
主路り照れ杉明風乃音羽山裏い
み嵐山だ数沢よおほ路る浅深渡
きも花ハ大井河ほさき小雪や
うら哉し母 はりや数えし時の
ほらえ はゐ乃種の峯まよう
すふ 別し名残情路衣惜遠屋か

おしむべし〳〵えがたきハ時
あひがたきハ友なるべし春宵
一刻價千金花に清香月にかげ
春の夜の花の影より明
ぞめて鐘をもまたぬわかれこそ
あれわかれこそあれ〳〵
まてしばし〳〵夜ハまだふかきぞ

しらむハ花の影なりけり
よそハまだ小倉の山陰に殘る
夜ながら嵐の花の雪ぞちるや
さめにけり〳〵あらしも雪も
散敷や花をふんでハ同じく惜む
少年の春の夜ハあけにけりや
翁さびて跡もなし〳〵